

主 題：恵みシリーズ2、罪のさばきからの救い ～救いを拒む罪～**聖書箇所：ヨハネの福音書 3章16-21節**

今日は皆さんがよくご存じのヨハネ3章16節から21節までを学んでいきます。前回学んだことを思い出していただきたいのですが、主イエス・キリストは「人は新しく生まれなければ神の国を見ることはありません。」とニコデモにお教えになりました。人が天国に入るためには何が必要なのか？新しく生まれ変わることに、新生が必要であると主はニコデモに教えたのです。そして、新しく生まれ変わるためには、信仰による救いが必要であると教えられました。もちろん、ニコデモにとってこのことは驚きでした。彼自身が信じ、彼が教えていたことは、信仰による救いではなく行ないによる救いだったからです。しかし、主はここで、罪が赦されて生まれ変わるには、イエス・キリストを信じる信仰が必要だということを、ユダヤ人たちがよく知っている一つの出来事をもって明らかにされました。

イスラエルの民がエジプトを出た後、罪を犯したときに、神は燃える蛇、毒蛇を送られたこと、噛まれて死にかけている人たちに神が約束されたことは、青銅の蛇を旗竿の上に付けて、人がそれを仰ぎ見るなら、たとえ蛇に噛まれてもその人は生きると。その当時の人々も神が言われたことを信じて、その信仰によって救いに与ったのです。ですから、イエスはそのことをニコデモに教えられました。救いは行ないによるのではなく信仰によるのだと、そのことを私たちは前回見たわけです。

今日の箇所を見てください。皆さんがよくご存じの3：16ですが、実は、その前の15節で主がニコデモに教えられたことは終わっています。そして、次にイエスが語られるのは22節からです。そうすると、ヨハネはイエスがお話になった「新生」、信仰によって生まれ変わるという大切な真理を、この箇所に記していることとなります。言い方を変えるなら、この3：16-21にはヨハネが記した「新生」についての大切な神学を見ることができるようになります。今からそれを見ていきますが、特に、この箇所でヨハネが教えようとしていたことは、このように要約することができます。「神のみわざ」と「人の責任」です。神が為された行ないと、それに対する人の責任です。

A. 神の愛 16, 17節

3：16「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」、ヨハネが言うことは、この「新生」を可能にしたのは「神の愛」だということです。あなたが救いを得て喜んでいること、罪の赦しに与ったことはすべて神の愛によるということをヨハネは教えようとするのです。16節の初めに「神は、実に、」とあります。「実に」とは「こんなに、これほどに、」という意味がありますが、ギリシャ語ではこのことばが最初に出て来ています。それには理由があります。ヨハネは神の愛の偉大さ、人間の知性や想像を超越した無限で深遠な神の愛のすばらしさを強調して、何とか人々に教えたいと思ったのです。

そして、彼は最初に「こんなに、これほどに」ということばを持って来て、その偉大さを人々に分からせようとするのです。神の愛がどんなにすばらしいのか？神の愛がどれほど偉大なのかということをやヨハネは読者に伝えようとするのです。16節では、ヨハネは「神の愛」について四つのことを教えていることに気がきます。

☆神の愛とは？**1. 神のご意志の伴ったもの**

16節の初めに「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」とあります。ヨハネはまず最初に、「神は世を愛された」と言っています。これを見て私たちは二つのことを考えます。

1) 神のご意志

「神は…世を愛された。」、一つは、神が世、つまり、私たち、神に逆らい神の敵として生きて来た私たち罪人を愛してくださったということです。「愛する」と決めたのは神ご自身です。神が私たちを愛さなければならぬ理由はありません。ですから、ここには神のご意志が明らかに示されています。

2) 無条件の愛

そして、神は無条件で私たちを愛して下さっていることが教えられています。神は世を愛したのです。神がそのようにお決めになり、条件なしで私たちを愛して下さった。この方は神ですから、私たちが何も言わなくても私たちのことはすべてご存じです。私たちがどれ程罪深く、どれ程神の教えに逆らって来たのか？そのことをすべてご存じです。でも、神はそのことを知った上で、神ご自身が決めたのです。「あなたを愛する」と。そして、あなたのために無条件でこの救いを備えて下さった。そのことをヨハネはまず教えるのです。Iヨハネ4：10を見てください。「私たちが神を愛したのではなく、

神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」、神の愛とは、あなたが神を愛したからあなたを愛してくださったのではありません。あなたが逆らい続けていた時に、神に背を向けて好き勝手な歩みをしていた時に、神はあなたを愛するとお決めになったのです。そのことがここに記されています。

2. 行動の伴ったもの

「ひとり子をお与えになった」とあります。つまり、このことばは私たちに、神の愛とはただことばだけでなく行ないの伴ったものであるということを教えています。ここで使われている「ひとり子」とは「他に類のない」という意味をもったことばです。とてもユニークな存在、当然です。この世に人として来てくださった神がユニークであることは間違いありません。そのようなひとり子をこの世に送るという行為をもって、神が私たちを愛していることを明らかにしたのです。実は、この16節の初めをこのように直訳することができます。「神は世を余りにも愛してくださったために、神はひとり子を与えてくださった。」と。皆さんに気付いていただきたいことは、この神が為さったすべての行為は、神の愛に基づくものだということです。私たちには理解ができませんが、神はあなたを愛して、そして、愛するゆえに、ご自身のひとり子をあなたのために送ってくださったのです。Iヨハネ3：18に「子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行いと真実をもって愛そうではありませんか。」とある通りです。

3. 犠牲の伴ったもの

「そのひとり子をお与えになった」とあります。もちろん私たちが、父なる神がひとり子イエス・キリストをこの地上に送ってくださったということを見るとき次のことを考えます。

1) 受肉

もうすぐ私たちは救い主の誕生を祝います。確かに、それは私たちにとって素晴らしい出来事です。救い主が来てくださった、私たちを罪から救い出すためにこの方が来られたと。

2) 十字架

しかし、この「ひとり子をお与えになった」というのは、ただ、人としてお生まれになったという受肉だけのことを言っているとは思えません。みことばを見るなら、このような表現はイエス・キリストが十字架の上でご自身をささげてくださったそのわざにも関連していることが分かります。たとえば、Iヨハネ3：16には「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。…」とあります。ですから、神は主イエス・キリストを私たちのためにこの地上に送ってくださった、もちろん、人となられたのですが、同時に、私たちを愛するゆえに、このイエス・キリストを十字架で殺すためにこの世に送ってくださったと言えます。ですから、ヨハネはヨハネの福音書15：13で最も大きな愛はこういう愛だと教えています。「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」と。私たちがイエス・キリストを見た時、イエスは喜んでご自分のいのちを捨ててくださった、それによって何が分かったのか？私たちが愛されているということです。

ですから、主の愛を見るとき、それはご自身の意志であった、神が愛そうと決められたのです。その愛はことばだけでなく行動が伴ったものです。私たちがもし神の愛を疑うなら、キリストの誕生を覚えるべきです。キリストの十字架を覚えるべきです。それらは私たちに明らかに、私たちが愛されていることを教えています。この方は喜んであなたのために犠牲を払うことによって、あなたを愛していることを明らかにしたのです。

4. 完全な赦しを伴ったもの

完全な赦しを与えることのできるものだということです。16節の後半に「それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」と書かれています。実はこの箇所初めに「それは」という接続詞が付けられていますが、その接続詞は「～をするために、～をする目的で」という意味をもっています。ですから、この後には主イエス・キリストがこの地上に送られた目的が書かれています。何のために父なる神はひとり子イエス・キリストをこの地上に送られたのか？何のためにイエスは地上に来てくださったのか？何のためにイエスは十字架で死んでくださったのか？その目的がここに書かれています。

1) 信じる者を「滅び」から救うため

この「滅び」ということばは「永遠の悲惨、死を招く」という意味です。一時的な悲惨でなく永遠に続く悲惨です。ギリシャ語の辞書では「永遠の滅び」と説明しています。ですから、ヨハネはここでイエス・キリストがなぜこの世に来てくださったのか？なぜ、十字架で死んでくださったのか？それはあなた自身を永遠の悲惨から救うため、永遠の滅びから救うためだと言うのです。

2) 信じる者に「永遠のいのち」を与えるため

「永遠のいのち」、私たちは普通、「永遠」ということばからはその長さを考えます。もちろん、私たちは罪赦された者として神とともに終わることのない時間をともに過ごすことができます。しかし、どちらかです。神とともに永遠を過ごすのか？神ではなくサタンとともに永遠を過ごすのか？感謝なことに、救いに与った私たちは神とともに永遠を過ごすことができます。確かに、「永遠」はその長さを思いますが、長さだけではありません。新しい人生の「質」です。なぜなら、私たち救いに与った者たちは、確実に言えることは、今までの生き方とは全く異なった生き方を実践するからです。私たちが何度も学んで来たように、神がくださる救いは神のみわざです。神が私たちを新しく生まれ変わらせてくださる、それはこれまでと同じことをしないということです。だから、人々は私たちを見て、私たちを変えてくださっている方を見るのです。

明らかに、私たちクリスチャンは神によって変えられ、変えられ続けている者です。ですから、永遠のいのちをいただいたと言ったときに、私は永遠に神と住むことができる、神とともに永遠を過ごすことができるということだけでなく、もうその瞬間に、私たちは永遠に生きる人へと生まれ変わったのです。言い方を変えるなら、私たちがイエス・キリストを信じて救われた瞬間に、私たちは天国民となったということです。

そうすると、私たちには天国民としての生き方が始まったのです。神に逆らって来た私たちが神を愛する者として生まれ変わったのです。ですから、「使徒の働き」を見ると、救われた人たちの変化を見て人々が驚いたことが繰り返し記されています。その中の特筆すべき人物はパウロです。キリストを迫害していた者がキリストを宣べ伝える者になったのです。だから、イエスによって救われた人は生まれ変わったのです。それが救いです。生まれ変わった者はこれまでと同じ生き方ができなくなります。心が責められて来ます。「それは神に喜ばれない生き方だ」と神によって心が責められるのです。そして、神に喜ばれる生き方をしようという新しい願いをもって、そのように生きていくのです。

このようにできるのは、救われた者には新しい心が与えられたからです。心は、私たちの行動、考え、意志、そのすべてが湧き出て来るところです。その部分を変えられたから、私たちは新しい願い、新しい思いをもって生きる者へと変えられたのです。それが救いです。イエスがニコデモに教えたことは「新しく生まれ変わる」ということでした。新生した人は当然、これまでと違う生き方をします。それが神の祝福である救いです。

イエスはこのように言われました。ヨハネ 10 : 10 「…わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」。「豊かに」ということばは「豊かに満たされ続けていく」という意味です。ということは、主によって救われた私たちクリスチャンは、罪の赦しを得て永遠のいのちをいただいただけでなく、今、生きているこの瞬間もすべてのことに満ち足りて生きることができる者へと変わったということです。なぜなら、私たちはイエスの喜びをいただいて生きているからです。私たちはイエスの平安をいただいて生きているのです。私たちは神から本当の満足をいただいて生きているのです。これは神が救われた者に約束されたことです。私たちが主によって贖われているなら、そのような生き方ができる者へと私たちは生まれ変わったのです。

ですから、永遠のいのちをいただいたということは、永遠の長い期間を、終わることのない期間を神とともに祝福の中を生き続けるだけでなく、今、天国民としてそれにふさわしく生きていくことができるのです。救われる前とは全く違う生き方をします。そのような人生を神は私たちに与えてくださったのです。

3) 信じる者を新しく生まれ変わらせる力がある

神はなぜ、イエス・キリストを信じる者を完全に生まれ変わらせることができるのでしょうか？なぜ、イエス・キリストを信じることによって私たちは天国民として新しい生き方を始めることができるのでしょうか？そのことについて 17 節のみことばが私たちに教えてくれますが、イエス・キリストには人を新しく生まれ変わらせる力があるとヨハネは言います。主イエス・キリストの十字架の死は、どんな罪人であっても、その人を新しく生まれ変わらせる力があるのです。17 節「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。」と言います。ヨハネはここで主イエス・キリストがこの世に遣わされたその目的について、初めの部分で説明しています。「神が御子を世に遣わされたのは、」と「遣わされた」ということばがあります。これは「使命を負わせて任地に遣わす、派遣する」という意味をもったことばです。つまり、ヨハネはイエスは偶然この世に生まれて来たのではないと言うのです。では、どのような使命をもって生まれて来たのか？「世を救うため」です。

◎主イエスの使命

(1) 世をさばくためではなく : 神が人間を見て、正しいことと間違っていることの判決を下すという神のさばき、そのためではないとヨハネは言います。イエスが最初にこの地上に来られた時、初臨と言いますが、その時にイエスは確かに、すべての罪人をさばくとは言われませんでした。救うために

来たと言われました。しかし、今度、再びイエスが帰って来られるとき、再臨ですが、その時には救うためではなく、さばくために来られます。そのことをヨハネは教えるのです。というのは、この当時の人たちは、救い主が来てくれたなら、自分たちイスラエルの敵をすべて滅ぼしてくれて、自分たちの王国を築いてくれると思込んでいるからです。だから、イエスは言われます。「そうではない。わたしが来たのは罪人を救うためだ。その任務のためにわたしはこの世に遣わされた。」と。だからこそ、その任務を遂行することができるのです。だからこそ、彼はすべての罪人を完全に新しく生まれ変わらせることができるのです。その目的のために神から遣わされたからです。

(2) 救われるため : その前に「御子によって」と書かれています。ヨハネはこの救いはイエス・キリストによってのみ与えられると教えています。救いの道はたくさんあるのではありません。何を信じてでも信心の気持ちさえあれば天国にいけると人々は言いますが、それは神の教えではありません。救いの道は唯一、主イエス・キリストによってのみです。だから、イエスは「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」と言われたのです(ヨハネ14:6)。みことばは明確です。救いの道は多くあるのではない、イエス・キリストだけが私たちに救いをもたらしてくださる方だと。使徒の働き4:12でも「この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです。」とある通りです。主イエス・キリストだけが救い主です。

この16、17節でヨハネが私たちに教えてくれた大切な教理は、「神によって備えられた救いは、どんな罪人でも新しく生まれ変わらせる効力がある。」です。これは私たち人間にとって大きな希望です。神はあなたのすべての罪を知った上でそれを赦してくださり、新しく生まれ変わることを良しとしてくださったのです。なぜ、神はこんなにすばらしい救いをご自分の御子イエス・キリストのいのちという大きな犠牲をもって備えてくださったのか？その答えをヨハネはくれたのです。それは「神があなたを愛しているから」です。

B. 人の責任 18-20節

愛について語ったヨハネは、今度は18節から「人間の責任」について語ります。そんなに説明しなくても皆さんは、神のみことばを聞いた者には責任が生じるということをご存じでしょう。聞いた教えに対して、示された神のみことばに対して、それに従うかどうかという責任が生じているということです。実は、そのことをヨハネは18-20節に教えています。

なぜ、この人間の責任というものをヨハネは教えたのか？それは、神の救いを拒んで地獄にいった人が、だれ一人としてそれが神のせいだと言えないからです。だれも「神が私を愛してくれなかったから、」とか「神が私を救ってくれなかったから」という言い訳ができないためです。ヨハネは言います。神は完全な救いを用意した、でも、その救いを拒んだ責任はあなただと。だから、地獄にいった人がだれ一人として、神のせいで私はここに来たという言い訳ができないために、みことばは明確に、みことばを聞いた人たちにそれを行なうか行なわないかという責任があることを教えています。そのことを18節からヨハネは教えています。

1. 選択とその結果 18節

18節「御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったもので、すでにさばかれています。」

1) 御子を信じる者への約束

「その人はさばかれませぬ」という約束です。もう、さばきは終わったのです。さばきは解決済みです。あなたの罪が赦されたゆえに、さばかれることはないのです。

2) 御子を信じない者への約束

その後「信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったもので、すでにさばかれています。」とあります。これは「さばき」の約束です。「さばかれています」ということばをヨハネは完了形という時制を使って書いています。なぜ、そのような時制を使ったのか？理由があります。ヨハネは、その人がもうさばきの継続した状態に入っているということを意味するために、これから入るというのではなく、もうすでにその状態にあることを明らかにするために、このような時制を使っているのです。ヨハネが言いたいことは、「すでにさばかれています。」と言うとその人にはもう救いのチャンスはないのか？救われることはないのか？その人たちは大変な間違いを犯しているということです。「信じない」という間違いです。神が備えた救いを信じないのです。

すばらしい救い主が来てくださって、完全な救いを備えてくださったことを信じない、それなら、どのようにしてその人は救われますか？ヨハネが「すでにさばかれています。」と言ったのは、その人はもう、さばきに服する罪を犯しているからです。赦しを拒んでいる以上、その赦し、救いをいただくことは有り得ないのです。創造主なる神が私たち罪人のために備えてくださった唯一の救いを拒んでいる以上、

その人には救いはありません。その人に待っているのは「さばき」です。

ですから、救われる可能性がないと言っているではありません。ここで言われているのは、さばきを受けるのはその人たちが救いを拒んでいるからで、拒み続けている人にはそのさばきから逃れるすべはないということです。ですから、ヨハネが教えることは、もうすでにその人がさばかれているのは、彼らが救いを拒み続けているから、このような運命を自分自身で招いているということです。でも、皆さん、もちろん、永遠の滅びに行く、地獄に行くことなど考えたくない悲惨な結果ですが、神から離れている人たち、神の救いを拒んでいる人たちは、地獄は私たちの想像を越えた苦しみが待っているのですが、今、私たちがこの地上に居ても、残念ながら、私たちが経験している祝福を経験することがないので。彼らは自分が救いを拒んでいるからもうさばきの運命にあるのです。それだけでなく、死んでから先は永遠の滅びだし、今、生きているときも神の祝福を経験することなく、大変みじめなのろわれた生活を送り続けていくのです。悲しいことです。

私たちは愛する者がだれ一人永遠の滅びにあってほしくないと願っています。ですから、いろいろな機会を用いて福音を語ろうとします。多くの人は思います。「もっと年老いてから…」とか「今は好きなことをして年取ってから信じよう…」と。いかにそれが愚かであるかを皆さんはご存じです。自分の好きなことをどれ程やっても神がくださる満足に比較することはできません。神がくださる祝福と私たちが自分の願いを叶えて自分の肉に沿って生きる人生とを比較するとき、それは比較にならないでしょう。だから、みな言います。自分の好きなように生きていけばきっとそこにはすばらしいものがあると。しかし、私たちは声を大にして言います。「そこには何もない」と。私たちが喜びをもって平安をもって、満足をもって生きることができるのは神によって救われたからです。だから、私たちは若いときに主を覚えなさいと言われるのです。なぜなら、その瞬間からそのようなすばらしい祝福をいただいて生きることができるからです。

18節でヨハネは、救われた者、イエスを信じた者に与えられた約束と、信じない者たちに対する約束を記しています。

2. さばかれる理由 18b-20a節

ここには「さばかれる理由」が三つ記されています。なぜ、彼らはさばかれるのか？なぜ、彼らは永遠の滅びに至るのか？「…神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれている。:19 そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行いが悪かったからである。:20 悪いことをする者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。」

1) 神のひとり子の御名を信じなかったから 18節

これが滅びる一つの理由です。「御名を信じなかった」ということは、救い主であり、真の神であり、主であられる方を心から受け入れていないということです。ニコデモに対してもイエスは同じことを言われました。どんなにこの救いに関する知識を持っていようと、天国に入るその知識を持っていようと、それを信じていなければ天国に入ることはできないのです。なぜ、彼らが地獄に行くのか？彼らは知識を持っていたけれど救われていなかったからです。主なる神であり、唯一の救い主である方を心から信頼して受け入れていなかったのです。そのことをこの18節でヨハネは滅びる理由として上げています。イエスを心から受け入れていなかった、それがさばかれる理由の一つ目です。

2) 神よりも罪を愛するから 19節

二つ目は19節にあります。「そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行いが悪かったからである。」と。

・「光」とは？ : 皆さんご存じですね。ヨハネの福音書1:6-12「:6 神から遣わされたヨハネという人が現れた。:7 この人はあかしのために来た。光についてあかしするためであり、すべての人が彼によって信じるためである。:8 彼は光ではなかった。ただ光についてあかしするために来たのである。:9 すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。:10 この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。:11 この方はご自分のくんに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。:12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」、人となられた神のことです。主イエスのことを言っていることは明らかです。

また、Iヨハネ1:5には「神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。」とあります。ですから、この「光」は神を指していることは明らかです。光である神がこの世に人として来てくださったのに、それも私たち罪人のために、罪から救うために来てくださったのに、人々は歓迎しませんでした。

・「やみ」とは？ : 「やみを愛した」とあります。「やみ」とは「罪、悪の領域」のことです。

だから、神が人としてこの世に来てくださり、私たちに救いを与えるために来てくださったにも拘わらず、人間はその方を歓迎するどころか、愛するどころか、それよりも罪を愛して自分の好き勝手に生

き続けるという、その生き方を選択していると言うのです。

3) 神を憎んでいるから 20節

「悪いことをする者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。」、三つ目の理由は「神を憎んでいる」ことです。「悪いことをする者」、これは現在形です。継続してそのように行なっている者、彼らは神を憎んでいるとヨハネは教えています。確かに、神を信じていない人は神を憎んでいる人であると、衝撃的なことをヨハネは教えます。でも、言われていることは事実です。なぜなら、神を信じないで神に逆らっている人たちの特徴は、彼らは神が喜ばれることを選択して生きるのではなく、神が憎んでいることを自ら選択してそのように歩んでいるからです。神を喜ばせることよりも、どうすれば自分を喜ばせることができるかと、そのことを考えて歩んでいます。

神によって造られていながら、その神に従っていくよりも、自分の思い通りに生きていこうとしています。ですから、彼らのやっていることは神のみこころに反することであり、神に背いて生きているのです。その生き方が私たちに教えることは、彼らがいかに神を憎んでいるかです。もし、神を愛するなら全く違う生き方をするからです。もし、そのような方がこの中に一人でもおられるなら、あなたを愛してこの世に人として来てくださり、あなたのすべての罪を負ってあなたの身代わりとして十字架の上で死んでくださることによって、完全な救いを備えてくださった方を憎むのはどうしてですか？なぜですか？どうして、そんな救いなど私には必要ないと拒むのですか？どうして、いのちを捨てて備えてくださった高価で尊い救いを馬鹿にして蔑んでこの方に逆らい続けていくのでしょうか？

神に逆らうことは愚かなことです。また、神に逆らうことは恐ろしいことです。なぜなら、さばきが来るからです。ですから、今すぐにそのような誤った生き方を止めることです。そして、救いのチャンスがあるうちに罪を悔い改めてこの完全な救いをいただくことです。

ヨハネはこうして、確かに、神はずばらしい救いを備えてくださったけれど、それを拒むなら、あなたは確実に永遠の滅びに至る、そして、その責任はあなた自身にあると教えます。でも、感謝なことは、あなたの罪を完全に赦すだけの力をもった救いが備えられているということです。

C. それぞれの特徴 20-21節

最後にヨハネは、救われている者とそうでない者の特徴を記しています。しかも、それらを比較して記しています。20-21節「:20 悪いことをする者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。:21 しかし、真理を行う者は、光のほうに来る。その行いが神にあってなされたことが明らかにされるためである。」

1. 信じない者＝さばかれる者 20節

1) 悪いことを行なう 20a節

「悪いことをする者」とあります。彼らは悪いことを継続して行ない続けるのです。それがその人たちの特徴です。神に喜ばれることなど考えません。自分のやりたいことを行ない続けているのです。

2) 光のほうに来ない 20b節

光を信じないということです。なぜ、光を信じないのか？その理由まで書かれています。

・「その行いが明るみに出されることを」 : 「明るみに出される」とは「真相をあばく、摘発する」ということです。

・「恐れて、」 : それを恐れるということです。「そうならないかと懸念する、～するといけないから」というのです。つまり、ヨハネは「神に逆らっている人たちが光のほうに来ないのは、自分の罪が明るみに出されること、自分のしていること、して来たこと、その生き方そのものが否定されることへの恐れだ」と言います。あなたのやっていることは間違っていると、そのように言われることがいやだから神の許に行こうとしないのです。私が今やっていることに満足したいから神のことなど考えたくないのです。今の生き方を継続したいのです。

これがその人たちの特徴だと言います。悲しいことに、その誤った選択ゆえに、そこにはそれにふさわしいさばきが来ます。

2. 信じる者＝さばかれない者 21節

1) 真理を行なう

先の「悪いことをする者」と比較されています。神の前に正しいことを行ない続けていこうとします。

2) 光の方に来る

その人は光のほうに来ます。悪い人は光を憎んで光の方に来なかった。しかし、この人は光の方に来るのです。神との交わりを楽しんでいるのです。神との交わりを喜ぶのです。なぜ、その生き方をするのか？その理由も書かれています。「その行いが神にあってなされたことが明らかにされるためである。」と。

・「明らかにされるため」 : 「知られること、はっきりすること、それが見えるように」という意味です。何が明らかにされるのか？

・「神にあってなされたこと」： 救われたことです。新しく生まれ変わったことです。ヨハネはこう言います。「救われた人は神に喜ばれることを考えてそれを行なう。そして、神との交わりを楽しんでいる。」と。その歩みを通してその人が望んでいることは、自分を変えてくださった神のみわざが自分を通して明らかにされていくことです。

皆さんはそのようにして生きておられるでしょうか？信仰者の皆さん、私たちが覚えなければならないことは、私たちはもう自分の好き勝手に生きる生き方は終わったということです。虚しい生き方でした。なぜなら、そのような生き方は私たちを永遠の地獄へと導くものでした。地上に居ても神の祝福を経験することなく、何をしても虚しさが付きまとい、満足のないものでした。神は神の恵みによって私たちを生まれ変わらせてくださったのです。そして、今、今日を私たちに与え生かしてくださっています。それは、私たちがこの神のすばらしさを人々の前に明らかにしていくためです。こんな神がおられ、こんな神によって私は愛され、こんな神によって私は生まれ変わったということを明らかにするのです。「神があなたのうちに為す行ないによって」、神があなたを変え続けてくださっていること、そのことを人々に示すことによって私たちはこの神を明らかにしていくのです。

だから、私たちの生活が変えられていくことが必要なのです。私たちが変えられていくことによって、私たちを生まれ変わらせてくださり、その後も変え続けてくださっている神のみわざが、そして、その方の存在が明らかになるからです。そのために私たちは生きています。それが救われた者の特徴だとヨハネは教えています。だから、そのように生き続けることです。神のすばらしさがあなたを通して現わされ続けていくように、そのために生き続けることです。神は私たちに一番ふさわしくないものをくださいました。このすばらしい救いです。それをいただいた者として、その救い主を誇り、その救い主を証するのです。

ヨハネがすばらしい救いによって私は生まれ変わった、神の愛はすばらしいとここで語ったように、今度は私たちがそれを語ることです。このすばらしい神の愛を私たちのことばでもって、また、私たち自身の日々変えられる生き方をもって証することです。

《考えましょう》

1. あなたに対する神の愛を具体的に記してください。
2. 罪人が永遠の地獄に至るのは、だれの責任なのでしょう？神ですか？それとも、罪人なのでしょうか？
3. 罪人が神のところに来たくない理由を挙げてください。
4. 救われた者にふさわしい生き方を、あなたのことばで記してください。